慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	H・B・メイヨ著『デモクラシーとマルクス主義』
Sub Title	H.B. Mayo : Democracy and Marxism
Author	奈良, 和重(Nara, Kazushige)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1958
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.31, No.5 (1958. 5) ,p.61- 67
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19580515-0061

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

うちの最終的な抵抗と大分和解しようとして舊連邦憲法以來保障されて來たものとも思われる。分離權は恒久的な連邦國家への參加に抵抗したドイツならびにそれ以外の非ソヴェト人民を滿足するため連邦憲法上に記載されたのかも知れない。分離權に關する憲法上の規定がどのような理由によつてであるにせよ、ソ連外の研究者にとつてこの權利は現實性を缺いたものと見える」(八五頁)、これがハザードの見解である。しかし彼はこの分離權の問題よりもむしろ連邦制の分銅として機能している黨の役割に注目し、そこからソ連的な連邦制の特殊性を理解しようとしていることを指摘しておきたい。

すなわち本書は民主主義的形態の本來的な機能を相殺するその分銅の發見、いいかえれば背反的な二側面の同時的な把握を通してソ連の政治制度そのものの全貌を理解しようとしているのである。そしてこのような思考の歸結の一つとして「危險はマルキシズムよりもつと根源的なものの内にある。それはマルキシズムを信奉する高僧達の哲學の内に、すなわちある一個の人間乃至はある一團の小數者グループのみが政策の決定について不謬であるという哲學の内に存在している」(一八七頁)ともいう。なお本書には appendix として連邦憲法と連邦共産黨黨規の全文が記載されている。

(中澤精次郎)

H. B. Mayo: Democracy and Marxism

1955, xi, 364 pp. Oxford University Press

H・B・メイヨ著

『デモクラシーとマルクス主義』

「今日、人類は新しいミノスを必要としている。人類は新しいミノタウロスに犧牲に供されている。そして未だテセウスは到着していない。現代の怪獸への貢物は相次ぐ戰爭において拂われてきたし、今やわれわれすべてが否應なく遭遇していることは、世界秩序内の共存か、それとも全面的共滅かの二者撰一である。……テセウスが同胞の絶望感に騙りたてられて怪獸を殺したと同じように、脅威の恐ろしさがそれを治癒することになろうかも知れぬ。問題の核心は戰爭を止めることなのだ。戰爭は、もはや今日では、合理的人間にとつての政策ではない。ヒットラーの戰爭がもし不必要であつたとしたら、冷い戰爭というものが正當化されないのはなお更のことである。それは非人間的な必然性、つまり地理的・經濟的あるいは歴史的な强制力に基因しているのではない。われわれはそうした言い分を要求することはできぬ。主として戰爭は、觀念の葛藤に基因している。現代のテセウスはイデオロギーの迷宮の中で行動しなければならないであろう」(John Bowle, Minos or Minotaur?:

The Dilemma of Political Power, London, 1956 pp. 11-12.）

ギリシアの神話傳說の比喩をかりて、現代世界が遭遇するディレンマを描いた右のジョン・ボゥルの言葉は、極めて妙を得ている。一九一七年十一月七日という日付は、二十世紀における歷史的事件の勃發した日として、われわれにとつて忘れ難い。F・シューマンがその名著『ソヴェトの政治』のまえがきにいつていることであるが、もう一つ、歷史的事件とするには餘りに間近のことで、われわれの記憶すべき事項の中に入つてこないかも知れないが、一九四二年十二月二日、それは、米國の科學者が核分裂の一連の實驗に成功した日である。そのことはまさに、「默示錄の第四の天使が太陽の上に注ぎかけた神の憤怒の鉢を直ちに想い起させるにたるだけのものをもつている」であろう。つづく四五年の七月十六日、ニューメキシコの沙漠で、世界最初の原爆實驗がおこなわれた。その後、原子核融合反應の法則が發見されるや、水素爆彈にまで進歩するに至つた。けれども、現在米ソ間におこなわれている核兵器競爭、それが齎すかも知れぬ人類滅亡の悲劇に對して、科學者は、本來、無答責である筈である。如何なる場合も、兇器は、殺人者の手に落ちはじめて、殺人を犯すものであるから。現代の終末を豫示する危機的病症こそ、核兵器を使用しようとするものの頑なに失した破壞的神話――政治的イデオロギーに、その深い病巢をもつていることは、誰しも疑がわない。

『デモクラシーとマルクス主義』の著者、H・B・メイヨは次のように卒直に述べている。「イデオロギー戰爭が一たび生ずるとすれば、それは單なる敗退の戰爭ではなく、皆殺しの戰爭となろう。というのは、異端を潰滅させる唯一つの徹底的方途とは、……異端者を殺しつくすことであるから。キリスト敎ヨーロッパは、ずつと昔、この野蠻な方法を試みたものだが、今日では、かつてよりもつと異端者がいる。異端者は死滅することはない。なお更に、非妥協的なイデオロギー的態度は、地球上いたるところで、永遠にわれわれを戰いつづけさせていくことであろう。……イデオロギー戰爭への全面的準備さえ、そしてそこに創りだされる同調性の雰圍氣は、……西歐をして、軍事的タイラニーと識別し難き軍國主義國へと轉向せしめる傾向をも生じさせつつある。……われわれが忘れがちなことは、戰わずして共存していくためには、先ず、われわれの形而上學に一致をみる必要はないということである」（三三〇頁）と。そしてソヴェトに對しては、「ロシアは、傳統的に、僅かの中產階級しかもたず、大衆間の隷屬と無知という背景にあつて、デモクラシーの體驗など皆無であつた。ロシアの政治的傳統は絕對主義、秘密政治警察、そして可成りの程度にテロリズムと暴力というものである。……陰謀はボリシェヴィキ自身の第二の本性であり、彼らは生來、どこでも自分に對する陰謀に疑惑をもつような習性に、陷つている。恐らく現代世界の最大の悲劇は、《社會主義》が政治的後進國へ、マルクスの名において、しかも狂信的革命家たちによつて導入されたということである」（三二五頁）。

しかしそれはそれなりに、ソヴェトは西歐世界をも凌駕する程の目覺ましいアクチュアリティを示してきている。それを賞讃するものも憎惡するものも、それを支えている偉大なる信仰、マルクス主義を評價してみる必要に迫まれる。そこでわれわれは、これまでに

もいろいろ論じられている問題ではあるが、以下にメイヨのマルクス主義批判の立場を記してみたい。著者はマルクス主義の體系を、辨證法的唯物論――マルクス主義の哲學的基礎（第一章）、經濟史觀（第二章）、階級闘爭（第三章）、黨・革命・プロレタリアート獨裁（第四章）、歴史哲學としてのマルクス主義（第五章）、マルクス主義と科學的方法（第六章）、マルクス主義・道德・宗教（第七章）に分けて論じ、最後の二章において、デモクラシーの理論（第八章）、デモクラシーとマルクス主義（第九章）の對決という現代的關心に觸れている。本書は何よりも先ず、マルクス主義の理論を正しく評價し、それのもつ眞理と虚僞を判斷してみることが目的であるように思われるから、ここでは、著者の見解を最も明確に示している部分のみを幾つか取り上げてみることにする。

マルクス主義の理論體系は、その一般的哲學である辨證法的唯物論の中に置かれている。ヘーゲルにあつては辨證法は逆立ちしている、その神秘的外被のうちにある合理的核心を發見するためには、彼の辨證法をひつくり返さねばならぬ、とは餘りにも有名な『資本論』序文の一節である。そこでメイヨはいう。「逆立ちしていようが、正しく立つていようが、辨證法が自然を眞實に記述するものであるかどうかは何も示されていない。……もし一方の哲學が僞りであれば、その反對が必ずしも正しくはない。辨證法的遊戯をもてあそべば、反對はアンティテーゼであろう。ヘーゲルの觀念論（テーゼ）、マルクスの唯物論（アンティテーゼ）、そしてジンテーゼの奇形を生みだす」（一八頁）。辨證法という論理のもつ御都合主義の柔軟な曖昧性は、㈠發展のどの段階でも、その立場によつて、恣意的にテーゼとして取ることができ、㈡どんな差異（デイファレンス）をも矛盾ないしは對立へと勿體ぶつて誇示され、㈢何らかのテーゼには多くのアンティテーゼを、したがつてまた多くの可能なるジンテーゼを對置し得ることにあろう（一五頁）。唯物辨證法とは理性と批判的檢討の範圍を超えた、まつたく捉えどころのない《ポリシェヴィキの公理》にほかならぬ。しかも、マルクス主義の論證する如何なる歸結も、普通の論理的操作、科學的方法――實驗、歸納、試行錯誤、推論など――によつて發見し記述し得ないものがあるだろうか（二八頁）。われわれがヘーゲルおよびマルクスの辨證法的思惟に負うていることといえば、ただ自然、社會、人間の闘爭、變化、過程を動態的に考察するということであつて、それは何も辨證法なくしても充分なし得ることである。もしそうとすれば、われわれはそれを新しい論理として認めることはできない。

マルクスはヘーゲルの辨證法的パターンを取り入れ、それを唯一の經驗的法則と看做して、自己の經濟史觀をおしすすめていつた。しかしここにも彼は、しばしば指摘されているように、ヘーゲルの形而上學と袂別し得ぬ皮肉な陷穽を造つてしまつた。すなわち、歴史的發展における《絶對理念》に置きかえるに、《經濟的基礎》という一つの決定的要因を以てすることにおいて。マルクスの理論構成を集約してみると、㈠生産力が經濟的基底をなし社會の上部構造全體を決定する ㈡一定の生産力に對應して《生産關係》、つまり所有關係が存在し、生産力と生産關係の對立・矛盾というかたちがとられる ㈢その歴史的な闘爭過程は階級闘爭として表現され、資本主義社會はその最終段階と考えられる ㈣資本主義の成熟ととも

に、ブルジョワジーとプロレタリアートが對極化し、革命的プロレタリアによる資本主義社會の轉覆によつてのみ、それは終焉させられる ㈣プロレタリアート獨裁という過渡的段階を經過して、やがて《階級なき社會》が到來し、國家は自然消滅して、各人の自由なるユートピアが建設されるはこびとなる。

この圖式について氣づくことは、第一にマルクスは資本主義社會の動きより以上のものを說明しようとしていること、歷史は、不可避的に、低次の段階から高次の段階へとそれ自身の內在的法則によつて發展していくということ、第二は、彼の歷史理論は科學的研究の結果として說明されているのではなく、あらかじめ辨證法的公式を指定し、それに事實を粉飾することによつて、もつともらしさを與えているということである。「マルクス主義の理論構成は人類の複雜な歷史全體に關する想像的假設、大膽な單純化であつて、マルクス主義者にも非マルクス主義者にも訴える偉大な力をもつている。だがそれ故に、それを卽座に片付けてしまつてはならない。その理論構成は、かえつて作業假說として取り扱い、批判的分析と事實の證據にゆだねられねばならぬ。……事實に對して提出さるべき問題は、事實は果してマルクス主義の辨證法的パターンの存在を、少くとも事實がそれと調和しているという意味において、確證しているかどうか、ということである。……もしマルクスの理論が事實に合致しているとすれば、それを支持することは不當ではなかろう。けれども、論理の問題からすれば、事實と一致している理論は、それだからといつて正しいと證明されるわけのものではない。というのは、その他の理論でも同じように、あるいはそれ以上によく事實に合致するであろうからである」(四一頁)とメイヨは强調している。

では、自ら《科學》たることの野望をもつマルクス主義を、通常われわれが理解している科學的方法と對照してみる時、如何なる齟齬を見出すであろうか。メイヨのいうように、要するに、「科學とは、經驗的觀察によつて實證することができる命題から成り立つ、自己を訂正していく體系である」(一八四頁)。科學的知識は事實によつて檢證され、既成の理論はそれに反する事實、豫期せざる事實によつて、絕えず新たにされ嚴密にされねばならない。科學者の態度というのは、理論と事實に對して「永遠の懷疑論者」のそれである。マルクスは、一八四五年頃までには、すでにヘーゲル主義の影響のもとに、その理論的體系の骨組を創りあげていた。しかしながら、このように事實研究に先立つて理論構成をおこなうア・プリオリの方法は、すべての社會科學者に共通する思考方法であつて、何もマルクスを非難するに當らない。ただその方法が嘆かわしき結果を招くに至るのは、「選擇される事實が理論を檢證し實證するためにではなく、例示するためにのみ選ばれる」という場合である(二〇二頁)。歷史の發展段階に關するマルクス主義の理論をとつてみても、奴隷制や封建制についての說明は、事實的裏付けを缺いた不正確なものにすぎない。資本制についての說明は百年前のイギリスの諸條件にとつては、極めて示唆に豐むリアスティックな見解であることを首肯し得よう。しかしその後の西歐の諸變化は、マルクスの科學的豫測を裏切ること甚だしく、マルクス主義者がオリジナルな分析の無謬性に執着することを不可能にしてしまつた。それにもかかわらず、彼等が理論的修正を峻拒しようとする態度は、《修正

主義者》、《偏向主義者》に對する激昂をみれば明らかである。

勿論、マルクス主義といえども、それ自體なんらの變化もしていないというのではない。現代コミュニズムにおけるレーニン・スターリン主義は、新たな固有の狀況に對處すべく、その行動に符合した理論であるといえよう。だが、彼等の教祖の福音書の字句をおびただしく鏤めたテクストには、どんな議論を容喙することが許されようか。「マルクス主義の悲劇はそれが含んでいる眞理の要素をドグマへと高揚してしまったことであり、すでにマルクス自らの自信に滿ちた青年時代にはじまった過程である」(二二〇頁)。かくしてマルクス主義の性格は、科學的方法と隔ること遠く、寧ろ宗教と酷似しているといえるのである。メイヨは、M・プランクの見解を引き合いにだしているが、新しい科學的眞理はそれに反對していた者が死去し、新しいアイディアに精通した新しい世代が成長することによってはじめて、勝利を博する。それに對して、マルクス主義がその教義上の純潔を保持、强制していく方法は、宗教的信條の場合にひとしい。それに反する解釋は欺瞞であり、懷疑するものは殺戮に價いする。マルクス・レーニン・スターリン主義は正統であり、それ以外はすべて異端である。われわれはローマ・カトリックの宗教裁判を想起しないであろうか。スターリンとチトーとの破綻は、十四世紀においてのアヴィニョンとローマとの法王のそれとパラレルであるといわれる(二二三頁)。

次に、歴史哲學としてのマルクス主義をみてみよう。マルクスはその經濟史觀を事實的資料に基づいて論述することとは別に、更に廣く歴史哲學的パースペクティーヴにおいて、歴史の動向を理解し、歴史の《意味》を究明しようとする。恰も偶然的事象のように思える歴史過程の背後に、それらを意味づける何ものかがあるという觀念は、すべての時代にわたつて、哲學者や社會科學者たちの蠱惑的な想像力を誘うてきた。人々が歴史に讀み込む意味は豐麗多彩である。多くの哲學や信念があると同じだけに、多くの歴史があるといえよう。「押しつけられた單純化もしばしば有益であり、必要ですらある。しかし、どんな秩序づけと統一が選ばれ、事實に課せられるかは、手元にある目的に依存しているのであるからして、それは特定な、もしくは特有の妥當性をもつのみである。それこそ歴史が常に書き改められている理由である。新しい哲學や視點がとられるにしたがつて、新しい歴史が書かれる」(一六三頁)。マルクスは十九世紀資本主義社會における法則性を普遍化し、歴史の傾向に對する一切の可能性を排除して、專ら未來への星占いをしたわけである。歴史の辨證法は經驗によって變更されることなく、かえつて經驗は理論に調整さるべきである、とマルクスは信じたのだろうか。かくて、「マルクス主義の理論構成は幾つかの固定的前提からの一連の演繹というよりは、……寧ろ社會と歴史の上に强いられた一種のゲシュタルト、あるいはパターンである。歴史のうちにかかる固定化された必然的パターンを想定することは、言葉の最も惡しき意味において、形而上學的である……」(一五六頁)と非難される。

マルクスの歴史の辨證法は、一見して、人間の意志とは獨立した嚴肅なる進行の過程であるように思える。しかしそれは、決して宿命論へ導かれているのではない。ヘーゲルにあつては、すべての歴史的發展は、絶對精神の終極的自己完結として、榮光と莊嚴とをプ

ロシア國家に注ぐことによつて自らを閉じる。それに對してマルクスは、未來の世界への道德的決斷――それは馥郁たる樂園への感傷的憧憬からするのではない――、約束された未來への、歷史は自らの側にあるとの確信を說く。カール・ポッパーの表現によると、前者が *moral conservativism* であるのに對して、後者は *moral futurism* である（Karl Popper, The Open Society and Its Enemies, rev. and enl. ed., London, 1952. Vol. II, p. 206.）。「階級鬪爭の理念はまた、勝利を受動的に待ちあぐむことに導くのではなく、鬪いを眞の鬪いとする意志と選擇の要素を充分含んでいる。辨證法的必然性は同じような神話のもう一つの面である。このことこそ、マルクス主義において革命をほんとのものにするのである。……マルクス主義の最大の力とは、まさしく決定論の背後にある道德的要素である。恐らく論理的曖昧さは、どんな通俗哲學にとつても弱さの根源では決してない」（一七八―九頁）。マルクスは高邁なる道德的理想主義者であつた。資本主義は害惡であり、破壞されねばならない。人間の自己疎外、勞働の商品化――資本主義社會に向けられた憤怒、マルクスは天使の側にあるのである。メイヨの批判は次の言葉に盡きる（四頁）。

The Sentence on capitalism came first,
the verdict and trial then followed.

このような崇高なる宗教性と高貴なる道德性は、必ずや人々に美しいヴィジョンを抱かしめずにはおかない。「一面において、マルクス主義は科學的理論、あるいは政治的プログラムを超えているのみでなく、多くの宗教をも超えている。それは思想の完全無缺な體系である。辨證法的唯物論の哲學的基礎において、マルクス主義は形而上學として、知識の理論として、また新しい論理として機能する。その史的唯物論において、それは歷史の說明を、道德律を、はたまた策略と戰術への指針たる行動プログラムをもつことを要求する。その全體において、マルクス主義は宇宙と人間と、その兩者との關連を說明し、そして人間の社會生活、科學、藝術、信念を說明する。マルクス主義以外には何ものもない。マルクス主義が科學、もしくは社會哲學とさえ看做されるなら、ほんとに驚異的な要求でもあろうが、それが完全なる神權國家に適した全體を包容する宗教と看做されれば、けだし當然な要求である」（二二五頁）。

マルクス主義の似而非的な救濟は、デモクラシーの深い傳統をもつ諸國に大量の支持を獲得できなかつたとはいえ、植民地や農業國における大衆にあつては、貧困、經濟的不安定、邪惡な統治、個人的欲求不滿などが、それに適應する好條件を提供している。「コミュニズムは、奴隷制と同じく、《すべての土壤に生える雜草》である。しかしそれは、未墾の土地にだけ作物を簇生させる」（三二一頁）。もつともこうした問題は、一般的には、マルクス主義の理論上の價値內容を討議したり批判したりすることとは別箇の事柄であつて、メイヨも認めている如く、それに有用な診斷は《心理的なもの》であろう。「深刻な社會的困惑や强度の國際的緊張の時にあつては、自分たちの疑問に對して、自信ありげな出來合いの解答をしきりに抱きしめたいと願う戶迷い脅えた人たちが常に存在していよう。……それ故、放浪の人々、不安定な人々、幻滅した人々、《信念に缺け、しかも懷疑主義に愕然としている》人々は、コミュニズ

ムにとつて多分に豊饒な土壌であろう」(三一九頁)。

マルクス主義者は、依然として西歐側に對しては、資本主義の獨占形態に君臨する惡德極まるブルジョワ・デモクラシーであると斷罪する。近代ヨーロッパ史においては、確かに、自由主義的デモクラシーと資本主義とは一緒に生成してきたけれども、歴史的相即性はそれの因果關係と同一化できない。初期デモクラシーの標榜した自由は平等と乖離し、平等が形式的なものにのみ止まつていたという事實には反省をうながされてきた。マルクス主義のいうプロレタリア・デモクラシーが經濟的平等と友愛のための輝かしき創造的未來を照射し、現代ソヴェトが人類のこの悠久な夢想を實現せんとしていることは、西歐に大きな衝撃を與えたことはいうまでもない。一方、西歐諸國も、マルクスの豫言に反して、社會主義經濟への《積極國家》の諸機能を果し、實質的な正義と平等の社會的・經濟的擴充を目指していることも否定し得ない(二七二頁)。究極的には、西歐デモクラシーもプロレタリア・デモクラシーも、《理想的》デモクラシーについては意見の一致をみている。「デモクラシーにとつての必要にして充分なる條件についての論爭は、理論的には、經驗的證據に訴えることによつて解決できることであろう。がしかし、マルクス主義の立場が、限定と獨斷的主張の立場である限り解決できない。それ故に實踐的には、まさしくこの教義的地位が、マルクス主義者をして、資本主義的デモクラシーの和解し難き敵へと追いやつてしまうのだ。……マルクス主義者はすべてか、あるいは無かを欲する。かくて、漸進的變化、混合經濟、立憲的枠内で活動することに同意することを拒絶する。彼にとつては、これらのことはそれ自體でよいものではなく、プロレタリアート獨裁への豫備としてのみ有用であるからである」(三〇九―三一〇頁)。

以上メイヨの所説が、現代イデオロギーの葛藤のさ中におかれた若きテセウスのために、アリアドネの導きの絲毬ともなれば幸いなことであろう。しかし彼は、デモクラシーを擁護する果敢なる神話的人物であろうとする前に、みずからの神話をも顧みなくてはならないのではないか。マルクス主義が神話であるというのと同じように、デモクラシーが神話ではないということを、容易に主張できるであろうか。われわれの形而上學についての一致をみる必要はないという、先に引用した箇所につづけて、「究極目標についての差異は、ユダヤ教を異教徒と、カトリックをプロテスタントと、マホメット教徒をヒンズー教徒と、無神論者を信仰者とに分つている。そしてこうした差異のいずれも、豫測可能な未來において、解決されそうに思われない。だが休火山は爆發する必要はない。われわれは、われわれを分けてしまつている深淵があるにもかかわらず、われわれの共通な人間性において、法と秩序とを願望することにおいて、また見解の相違への手續上の同意ということにおいて統一され、デモクラシーのうちで共存することを學んできた。國際政治の分野においてもまた然りである。國際社會は、われわれがすべての基礎的なことにおいて同じように考えるということを、必ずしも前提としていない。……戰爭は、いずれが正しいかを解決するのではなく、ただいずれがより强力であるかを解決するのみであろう……」(三三〇―三三一頁)と述べられている點を、より深くほりさげて考えねばならないのである。

(奈良和重)